

「主イエスの祈り」

ルカによる福音書 22 章

31「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。32しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」33するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。34 イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

* *

1) シモンの自信

シモンペトロも、他の弟子たちも、イエス様のためだったら、投獄も殉教もいとわないという思いがあり、それは真実だったと思います。

ペトロの中には「裏切る」ことなど全く想定外だったと思います。

「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」

とペトロは応答しています。

イエス様への深い信頼と愛は間違いなくペトロの心にはあったのです。

でも、イエス様はペトロの苦難、弟子たちの苦難を予告しておられます。

ペトロばかりでなく、弟子たち全体が心の中に感じ、経験する暗闇の出来事でもありました。

ペトロはその夜3度イエス様を知らないと言って裏切るのですが、他の弟子たちは十字架にかかるイエス様を見ていることができず、みんな散り散りに逃げ去ってしまっているのです。つまり、ユダの裏切りは有名ですが、イエス様の弟子たちのほとんどが十字架に掛かったイエス様を見ることもせず、逃げ去ってしまったのです。十字架の現場には数人の女性たちとヨハネだけがいたことが記録されています。

2) 現実的な弱さと絶望感

そしてこういう記事が現実起こります。

ルカ 22 章 54 節～

54 人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。

55 人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。

56 するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座しているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。

57 しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。
58 少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。
59 一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。
60 だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。
61 主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。
62 そして外に出て、激しく泣いた。

ペトロにとってこれほど悔しい思いをしたことはなかったと思います。人生は勝ち負けではありませんが、この時こそ自分の至らなさ、高慢さ、そしてイエス様への申し訳なさを思い知らされたことはなかったと思います。自暴自棄になりそうな場面だったと思います。

しかし、イエス様はペトロがこういう道を通することを知っておられました。しかも、祈りの中にあるように、それは「弱い仲間たちを理解し寄り添って生きることができるようになるためのいわば試金石でもありました。ペトロは申し訳なさとの足りなさを味わい、激しく泣きました。

3) イエス様の祈り

しかし、イエス様はこれらのことが起こることを承知していました。すでにペトロのこの失敗を見越した上で、励ましの言葉を語っています。

31「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。 32しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

ここに大きな生きる希望が伝えられています。この言葉のゆえに、ペトロは自暴自棄になることから救われたと思います。

ペトロへの言葉ですが、実はこれは私たちへの言葉でもあります。ペトロと同じような失敗が、どこか高慢さを隠し持っている私たちにも必ずあるからです。

イエス様のペトロへのメッセージは3つ。

1) 避けられない試練、失敗は必ずある

神様に愚痴を言いたくなるような出来事は私たちの人生には必ず存在します。でも、それは愚痴っても仕方ありません。現実をしっかりと見据えて前に向かう必要があるのです。それは振り返った時、身に染みて、あれは自分の高慢だったとか、罪だったとか、はっきりわかることが多いのです。

2) 信仰がなくならないように祈った

私たちは自分の失敗を赦せず、人を責め、言い訳をし、信仰など不要だと思込んでしまうことがあります。自暴自棄になりやすいのです。

でも、イエス様はそれを望んでおられません。ペトロ、イエス様を3回も裏切ったペトロに対してイエス様は責めるところか「あなたのために、信仰がなくならないように祈った」と伝えていきます。

自分の愚かさや傷つき、うなだれ、泣き崩れるペトロに対するイエス様の心は信仰を捨ててはならないという思いです。立ち直るための機会は必ずどこかに用意されているのです。

さらにイエス様の言葉は続きます。

3) 立ち直ったら兄弟たちを力づけてやりなさい

仲間たちへの支援的な生き方が期待され、望まれているのです。

他者を力付けるという生き方。

これは、おそらく、相手に対して高飛車に「ああしろ、こうしろ」と命令口調で語るような生き方ではないでしょう。

その人と一緒に横並びになって、散歩しながら語り合うような「生き方」。今、社会の中に「伴走型支援」という言葉が用いられ始めています。

「伴走型支援」以前の支援方法は「解決型支援」と言われるものでした。

「ああして、こうして、これをやって、はい、さよなら」というような空気の支援。

でも、ここには弱者の永続的な支援にはつながらない高圧的な雰囲気が大いに溢れています。

伴走型支援は「答え、解決はないかもしれないけれど、一緒にあれこれ考え、いろいろな人たちに助けをもらいながらなんとか「生きる」を励ますことができたらうれしい」という発想による継続的な支援です。

支援と呼べるかどうか怪しいところもあるくらい、「まあなんとかなるように助けを見つけて進んでみましょう」という当事者を巻き込んだ「励まし合い」のような内容です。

それまで弟子たちの中では指導的な、親分的な立場でものを語ってきたペトロですから、それまでのような偉そうなことは言えなくなっています。

でも、イエス様はそういうペトロに「仲間を励まし、力づけてあげなさい」と語ったのです。

ペトロは多くの場合、「そこにいいる」ことしかできなかったのではないかと思います。あとは、他の弟子たちが求めてくる要望に対して精一杯、応答すること。華々しく、先頭を切って命令する将軍のようではなく、馬の世話、部屋の片付け、他者の食事の後片付けなどを喜んでさせてもらいつつ、大事な責任をも担う生き方があったのだと思います。

ペトロの活躍は使徒言行録に出ています。人が変わったように爽やかに説教し、指導的な役割を果たしています。でも、間違いなく、それはこの失態の際に学んだ「謙遜」と「イエス様の祈り」が土台になっていたにちがひありません。

* * *

MACF 礼拝の Youtube 動画はこちらです <https://youtu.be/KJwGL2UI3GU>